

## 講演 南部敦子さんの思い出

本稿は特別ゲスト アマディオ アルボレーダさんの英語によるスピーチを、通訳をお願いした18回生寺澤美代子さんにとりまとめて頂きました。



南部久子様、直美様、千里山会会員の皆様

まず最初に、千里山会総会にお招き頂き、皆様の前でお話する機会を与えて下さった千里山会の皆様方に感謝申したいと思います。私にとりまして大変光栄なことと存じております。

次に、久子様が大切になさっていた敦子さんの写真の一枚を私に分けて下さり、温かなお手紙の中で久子様の思いをお伝え下さったことに、心からの深い感謝の念をお伝えしたいと存じます。これらの写真や手紙は、今や私の貴重な宝物となっております。そして今回、遠路東京までお出まし下さり、お目に掛かれる機会を与えて下さったことにお礼を申し上げます。

更に、敦子さんのお嬢様にお会いできるとは思いがけないことでしたので、直美さんにお目に掛かる機会を得ましたことを大変に有難く思っております。

私が南部敦子さんの姿を目にしたのは、遠くから

で、しかも短い時間に過ぎなかったのですが、その短い時間が、私に強烈な印象を与え、五十年以上経った今でさえ、敦子さんのことを覚えていることになったのです。何故私が、彼女のことを長年記憶に留めることになったのか、また彼女が、どのような影響を私に与えたのか、本日はその理由をお話し、私達が一九五四年五月にマニラで得た素晴らしい体験のいくつかを、皆様方にお伝えしたいと思っております。

一九五四年に開催された第二回アジア大会に出場した日本チームは、太平洋戦争の終結後にも見られたフィリッピン人の反日感情を変えるのに大きな役割を果たしました。敦子さんが、意図的でないごく自然な振舞いで日本チームを助けておられたことをよく覚えています。競技を通じて日本の若いメンバーが、フィリッピン人の間にあった緊張感を弱めるのに果たした効果は、どんな政治家や、その道の専門家が行えるものよりもつと効果のあるものでした。勿論、その効果については、どれも意図して行われたものではありませんでした。チームの若いメンバー、とくに一人の若い女性が、フィリッ

ピンの若者と直接接することのよつてもたらされる効果について考えていた者は、当時一人も居なかったでしょう。

彼女が私にもたらした影響は、個人的により大きく、より長く続くもので、事実現在まで続いているのです。なぜ彼女が、このように強い印象を私に残したかの理由を特定することはできません。多分、彼女の自然で魅力的なスマイルのためだったかも知れません。又は、同世代のフィリッピンの若者と話す際の彼女の誠実さからだったのかも知れません。或いは又、彼女が運動能力を発揮する際に見せた熱心さのためだったからかも知れません。彼女の印象が私の心に残った理由を言えないものの、事実残ってきたのです。彼女の名前を聞かないまま何年も過ぎた後でさえ、敦子さんの名前は心に深く残ったのです。

一九五四年は、フィリッピンにとつても又、多くの面で重要な年に当たっていました。その一つは、太平洋戦争が終わった同年の一九四五年に、フィリッピンが独

立国となつて以来初めて、主要な国際行事の開催国となつた年でありました。

次に、この年は第二回アジア大会出場のため、一九四五年以来初めて、日本の国旗の下に大勢の日本人が、フィリピンにやつて来た年でした。

最後に一九五四年は、『フクボン・バヤン・ラバン・サ・ハボン』通称『フク団』と呼ばれた反日人民軍が闘争を中止するに至つた年でもあつたことです。四年間にわたる日本の軍事占領でフィリピン人が被つた被害は大きく、日本人に対する憎しみは、戦後八年経つた当時でもまだ強いものでした。しかし、アジア大会に日本人チームを受け入れたこと、人々がフク団を拒絶していたことは、日本人に対するフィリピン人の感情が変わり始めていたということを示めていました。

意図して行われたものではなかつたものの、アジア大会の期間中に起こりつゝあつたフィリピン人の国民感情の変化をもたらすのに、日本チームは主要な役割を

果たしていました。多分敦子さん本人も、当時自覚していなかつたことでしょうが、彼女はチームの中でも中心的な人物でした。勿論、ほかの若い日本チームのメンバーも活動的でしたが、敦子さんの存在はもつとも極立っていました。

一九五四年私はアテネオ・デ・マニラ大学(The Ateneo de Manila University)の二年生でした。私は、他のクラスメートと違ってフィリピン系米国人です。私の父は、高校と大学教育のために、一九四八年に私をフィリピンに連れてきました。そのため、フィリピンと日本の関係についての私の見方は、級友達の見方と多少違つていたかも知れません。それでも私は、クラスメートの感情についてはよく理解しておりました。

私達が大会の予選競技を見に行った時、私達は、一人の女性競技者がほかの人達とは違つていることに気が付きました。私達の好みによるのかも知れませんが、彼女のフォームは、非常にめづるべきであり非常に優雅、それに努力なしでやれる天性を備えている風に見えまし

た。程なく私達は、彼女の名前が南部敦子さんであること、すでに数種の記録保持者であることを知りました。

最初私達は、日本の選手にサインを求めたり、話しかける折には注意深くしていました。にもかかわらず、選手の多くが、私達と同じ年令であつたことから、私達も彼等に関心を持つていったのです。大会前には警察から、反日グループによる反日暴動に対する警告が出されていきました。私達の大学も又、巻き込まれて攻撃されたり、怪我することのないよう、日本人には近付き過ぎないようにと伝えていました。新聞やラジオの番組でも、暴力の行使や、暴力的な攻撃の起きる可能性について伝え、注意を促していました。こうした不安や心配にもかかわらず、暴力沙汰は何ひとつ起こりませんでした。日本チームの競技は、実に見事で、フィリピンの人々から好意的に受け入れられたのでした。

チームに関して多くのニュースが報じられていました。その多くが、敦子さんに関する記事でした。記事のいく

つかは、彼女の運動選手としての技能や評判に関するものでしたが、全般的には、彼女について「温かい(warm)」、好まし(likable)、大変に美しく(v ery pretty)という表現に焦点が合わされていきました。五月三日付のマニラクロニクル新聞(The Manila Chronicle Newspaper)は「日本の可愛い選手、南部敦子は、100 m走を12.5秒の速い記録で終えた」と伝えていたし、五月五日付では「日本の美しい南部敦子は女性の100 m走決勝で優勝し、彼女の有名な名前の期待に応えた」と伝えていました。大会の競技を通じて女性でも男性でも、フィリピンの選手でさえ、このような注目度で報道された選手はおりませんでした。このことは人々に、とくに多くの若者に強い印象を与えました。彼等は、彼女が競技場に現れるたびに拍手で迎えました。彼女は男子学生にとってアイドルであり、私達殆んどみんなが夢中になっていました。彼女の周りには称賛者が取り巻いていました。私達は彼女に話しかけたり、握手したり、サインをもらい、一緒に写真を撮ることが出来ました。敦子さんが日本へ帰つていった時、私達は彼女が、非常に温かな余韻・面影(Shadow)(注1)をマニラに残していつてく

れたと感じたものでした。

私は、一九五六年大学卒業後にフィリップスを離れ、大学院で学ぶために米国に戻りました。その後私は、一九六九年に東京大学出版会で働くために日本に来るまで、敦子さんについては忘れた状態でしたが、日本に来ることになって、日本到着後にやろうと決めたと一つのは、彼女がどうしているか知るといことでした。日本に来て約一年経った一九七〇年に、私は新聞で彼女が交通事故で亡くなられたと知り、大きなショックを受けました。

結局、私は日本に落ち着くことになり、一九五四年と一九七〇年に知った敦子さんのことを時折考ええたものでした。二、三年前から、彼女の顔を覚えていては、もはや不可能だと思ひ、彼女の写真を探し始めました。その経緯は千里山会誌に寄稿(注2)されている通りで私は遂に千里山会誌の存在を知り、何人かの方のお世話で、私は、南部久子様が大切になさっていたマニラのアジア大会での敦子さんの写真のコピーを久

子様より受け取らせて頂いたものでした。142のゼッケンを付けた彼女の姿を五十四年ぶりに目にした時、一九五四年五月の日々が私の心に浮かんできました。それは本当に素晴らしい瞬間でした。

敦子さんの母上から素晴らしい写真を頂いたもので、これ以上写真を探す必要はなくなっていました。しかし一方では、何年も前に、私達が敦子さんと会った時に感じた喜びや称賛の気持を、母上や敦子さんの同級生の方々にも共有してもらいたいと願っていました。そのためには、当時のフィリップスの新聞記事をお見せすることが最上の策だと思ひ、一九五六年度アテネオ・デ・マニラ大学卒業の同窓生代表に手助けを頼む手紙を書きました。

私の依頼に応じてくれた一人が、フィリップスの前外務副大臣であったロドルフォ・セーヴェリノオ(Mr. Rodolfo Severino)でした。彼は、敦子さんの記事の載ったタイム誌を所有していて、その記事のコピーの入手法を教えてくださいました。

は、一九五四年当時のまま凍り付いた状態です。当時というのは、私達みんなが若く、希望に満ちていた時代でした。南部敦子さんの温かい面影と名前は、凍り付いて残る状態ですが、決してわすれることの出来ない大切な思い出として、私の心に深く残っているのです。

~~~~~  
敦子さんの思い出を新たにすることを助けて下さった千里山会の方々に感謝申し上げます。

一九五四年に私が見たままの敦子さんを、再び見ることが出来るように手助けして下さいました南部久子様にお礼を申し上げます。

敦子さん、フィリップスの若者が、日本とフィリップスとの友情を育てることが出来るように手助けして下さいましたあなたの温かさと思ひやりに感謝申し上げます。

敦子さん、ありがとう。

二〇〇九年一〇月三日

アマディオ アルボレーダ(Amadio Arbolada)

私は、若いアテネオ同窓生であるカチヨ出版のラモン・スニロ氏(Mr. Ramon Sunico)にも手助けを頼みました。彼は、私が頼むまで、敦子さんについて何も知らなかったのですが、新聞記事のコピーや写真を手に入れるために、かなりの働きをしてくれました。私が今までに引用した数種の新聞記事や数枚の写真を見付けてくれました。これらの古く不鮮明な写真は、日本の新聞写真のように良くはないのですが、当時のフィリップスの人達が、敦子さんのことをどのように見ていたかを物語っている点で、特別に大切な物なのです。

勿論、私の覚えている敦子さんは、一九五四年当時の姿だけ、しかも、主にトラックを走っている彼女を遠くから見た時の姿です。先日久子様より頂いた写真と、「月刊陸上競技二〇〇八年十二月号で父上南部忠平氏と並んで坐っておられる敦子さんの写真、最近見つかったロサンジェルスで撮影された写真とを見る限りませんでした。だから、私の覚えている彼女の面影

(注1) アルボレーダさんは「スピーチの中でshadowという言葉を選んだ時には、“人去留影”という中国語の表現が心の中になりました」と後日話されました。

(注2) 千里山会会誌十二号

国境を越えた親善の輪

―南部敦子さんの功績を偲ぶ―